＜特集:ツアーで出会う＞

スタディツアー型授業と学び

―台日交流2010夏の事例から見えること―

文野峯子

要旨

筆者が所属する人間環境大学と台湾の東海大学は、2006年より日台の学生が互いのキャンパスを訪問し合い，フィールドで協働学習を行う授業（スタディツアー型授業）を実施している。学生主体のこの活動では，学生は教室型の授業では体験しないであろう多くの課題に直面し，その体験を通して大きく成長する。近年このような学生主体の活動における「学び・成長」に関心が高まっては来たものの，その実態が十分に明らかにされているとは言い難い。

そこで本稿では，2010年夏の活動に参加した日本人学生2名の振り返りインタビューの語りを通して，スタディツアー型授業の意義を検討した。その結果，価値観が異なる他者とのコミュニケーションの体験は，学生に葛藤と気づきの機会を提供すること，その意味で，価値観の異なる他者との意思疎通が前提となるスタディツアー型の活動は，学生の視野を広げる可能性が高いこと，努力が報われる体験よりも苦しい葛藤プロセスを持つ体験の方が学生に「学び」を感じさせること，学びのプロセスは多様であり，固有であること，などが見えてきた。

今後の課題として，学生の主体性を確保しつつ学びの環境を充実させる方策，具体的には，学びのプロセスを促進させる活動のデザイン，教師の介入・支援の方法について更なる検討が必要であること，また，学びのプロセスの解明を進めていくために，多くの事例研究とその知見の蓄積が求められることが示唆された。

キーワード:　スタディツアー，学び，コミュニケーション，誤解，葛藤

1．はじめに

筆者は，ここ数年日本と台湾の大学生が互いのキャンパスを訪れ共にフィールド調査研究を

行う活動(スタディツアー型授業,以後略して「スタディツアー」)に携わる中で,毎回「あの学生一回り大きくなったね」と言われる学生を目の当たりにしてきた。この「一回り大きくなった」は,「成長」と言い換えることができるであろう。一体,スタディツアーは,学生にどのような学習環境を提供したのだろうか。

近年,学生が主体的に活動するタイプのスタディツアーに関心が高まり,その成果も報告されるようになってきたが,スタディツアーという学習形態のどのような要素が学生を一回り成長させるのか,その成長のプロセスはどのようなものかについては,未だ十分に検討されているとは言い難い。

そこで,本稿では,2010年夏に実施したスタディツアー(以後「台日交流2010夏」)に参加した日本人学生2名の事後インタビューにおける語りを通して活動を振り返り,スタディツアーの意義を考えてみたい。

2．スタディツアーの概要

学生の語りを分析する前に,本稿が報告するスタディツアーの歴史と概要を示し,その特徴を整理しておきたい。

1） 5年前にスタート

本稿が取り上げるスタディツアーは,2006年に始まり,2010年で5年目となる。この間,春休みには日本の学生が台湾を,そして夏休みには台湾の学生が日本を訪れるという方法で,年に2回の交流を行ってきた。

2）学生主体の活動

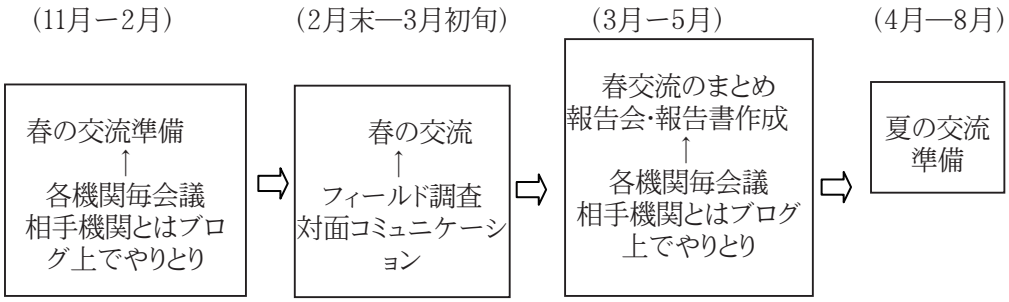
本活動には,くり返し参加する学生が多い。この活動経験者たちが,次の活動の中心となり,後輩たちに経験知を引き継いでいく。チーム作り,テーマ決定,活動内容の検討もすべて学生主体で行う。フィールドもチームのメンバーも毎年変わるため,学生たちは経験知だけでは解決できないさまざまな困難に直面することになるが,その都度学生同士で討議を重ね解決していくことになる。本プログラムは,この問題解決プロセスを重要視するため,教師の介入や支援は極力控えるようにしている。

3）年間を通じて行われる活動

図1に見るように,活動の期間は,準備期間と活動終了後のまとめの期間を含めると春夏

各々がほぼ半年間となる。春の交流のまとめ期間が終わると同時に夏の交流の準備期間がスタートするため，本活動では年間を通じて何らかの形で学生間のやりとりが行われていることになる。

図1＜年間を通じた活動の流れ＞



対面で活動する交流期間（約10日間）以外では，日台の学生はそれぞれのキャンパスにおいて話し合いを行い，その結果をブログに書き込み，海の向こうの相手校の学生たちと共有する。

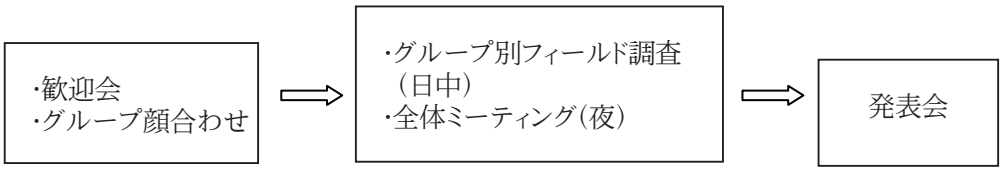
4）交流期間中は，24時間接触

交流期間は，一つの場所で寝食を共にしながら調査活動を行う「合宿スタイル」と学生の家にホームステイをするスタイルの組み合わせで行われる。いずれの形も，朝起きて夜寝るまで仲間と活動を共にする。2010年夏の台日交流は，合宿形式で行われた。

5）「台日交流2010夏」の活動の内容

台日交流2010夏は，8月29日から9月5日までの8日間で実施された。8日間の活動は，以下の図に示す内容で，日本の地方都市2市をフィールドとして行われた。

図2＜台日交流2010夏の流れ＞



３．振り返りのインタビュー[1]に応えた日本人学生２名

ここで，分析対象とした2名の学生のプロフィールと体験について触れておきたい。

３．１　２名の共通点

１）初めての参加，リーダー

インタビューに応えてくれた日本人学生2名，田中と鈴木（いずれも仮名）は，初めてこのスタディツアーに参加した。活動への参加体験はなかったが，学年が上（3年生）ということでグループのリーダーに推薦された。

２）意思疎通に困難が予想されるグループ編成

2名が率いるグループは，他グループと同様に5，6名の日台混成の編成であり，本活動の経験者と未経験者が混在している。グループ内の台湾の学生の日本語運用能力も多様である。日本語・中国語の通訳ができる者から，日常のコミュニケーションにもサポートが必要な者もいる。つまり，グループ内の言語による意思疎通という面では，かなりの工夫と努力が予想されるグループである。

３）危機的な体験を乗り越える（筆者の観察より）

この2名の率いるグループの活動は順風満帆ではなく，一時は田中も鈴木も次の3．2節で述べるような危機に直面した。しかし，2名ともなんとかこの危機的状況を乗り越え，最後までリーダーとして活動に参加することができた。

４）インタビュー内の語りの内容

2名の振り返りインタビューにおける語りの内容にも共通点が見られる。2名は，「楽しかったこと」，「難しかったこと」，「ストレスを感じたこと」というインタビューの質問にいずれも対人コミュニケーションを挙げている。さらに，最後の質問である「この活動を通して学んだことは何

か」においても，2名が口を揃えて危機的な状況に追い込まれた体験，具体的にはグループ内の一人の日本人学生とのコミュニケーション上のトラブルを挙げ，この辛い体験から学んだと答えている。

つまり，この2名にとって台日交流2010夏は，初めて出会う他者とのコミュニケーションを通じて，コミュニケーションの楽しさ，難しさ，辛さを体験する場であったということになる。中でも最も辛いコミュニケーション体験を通して学びを実感したのである。

３．２　田中と鈴木の危機的な体験

ここでは，2名が学びの体験として挙げた事件の概要を簡単に記す。

１）田中の危機的な体験

活動最終日，発表当日の朝，活動全体のリーダーより，田中が「発表会には参加できない」と泣いているという連絡が教師に入る。グループ全体をまとめて，全員で発表しようと発表会当日の朝まで頑張ったが，どうしても全体をまとめることができなかったというのが理由だという。中でも，グループの中の日本人メンバーの一人Ａとうまくコミュニケーションがとれず最後まで協力が得られなかったことが彼女を悩ませたということであった。

知らせを受けたのが発表会開始時刻直前であったため，田中グループ以外の学生と教員は発表会場に移動した。田中のグループは，別室で話し合いをすることになった。田中が最もコミュニケーションをとれない相手として遠ざかっていたＡから話し合いの申し出があり，グループメンバー全員が見守る中で田中とＡの話し合いが行われることになったとのことであった。発表会と並行して別室で行われた30分ほどの話し合いの結果，誤解が解けたということで，田中のグループも発表会場に現れ，グループ全員参加で発表を行うことができた。

２）鈴木の危機的な体験

活動終了日の2日前，活動全体のリーダーから，鈴木のグループメンバーの一人の日本人学生Ｂが，「自分にとって，この活動にこれ以上参加するのは無理だ」と言って家に帰ってしまったという連絡が教師に入った。日本人学生Ｂは，鈴木よりも年上の社会人学生であり，活動開始直後からおとなしい鈴木に代わってリーダーシップを発揮していたようである。

トラブルは，たまたまＢが一晩自宅に戻らなければならなくなった日のグループミーテイングで決定した内容に対して，Ｂが不満を表明したことから顕在化することになる。活動全体のリ

ーダーや友人が仲介をし，鈴木とBが電話やメールで和解の話し合いを持つが，結論に到達する前にBから「話し合っても無駄」と話を打ち切られてしまったという。

その後，教員や友人の説得を受けて考え直したBは，発表会前夜グループに戻ったグループに戻った。その結果，発表会では，鈴木のグループも全員参加で発表をすることができた。

４．インタビューの語りを通して見えてくる２名の体験と学び

ここでは，インタビューの質問項目に沿って2名が語った体験を詳しく見ることによって，ふたりにとって台日交流2010夏のスタディツアーがどのような学びの場を提供できていたのかを考えてみたい。

４．１　活動全体を振り返った感想

４．１．１　事例

田中は，活動全体の感想を求められて，「最初は不安だったけど，生活するうちに互いの距離が縮まって楽しくなり（その生活がない）今はさみしく感じる」と振り返っている。（以下，下線は筆者による）

（田中－1）全体を振り返って

最初は，あーやっていけるかなという不安とかもあったし，なんか最初のほうとかは，やっぱ一週間持たないかもとか思ったのが本音で。でもやっぱ生活していくうちにお互いの距離も縮まってって，すごく楽しい。その生活が当たり前に感じて。逆に，今はあーさみしいな，ってなって。

この発話から，田中はこの活動の体験を「不安が楽しさに変わった」物語として語ろうとしていることが窺える。また，「お互いの距離が縮まった」ことが「不安」を「楽しさ」に変えているという語りは，田中にとって不安の原因は，初めて出会った他者と共同生活をするという体験であり，活動を「楽しい生活」にするには，「距離を縮める」，つまりコミュニケーションの問題解決が必要であるという認識を示していると考えることができる。

では，鈴木は，活動全体を振り返ったのだろう。

(鈴木－1)全体を振り返って

僕はこういう交流が初めてなので，こういうものかと受け入れていたふしはありますけど，通じる通じないはありますよね。何をしたいのか，何に困っているのかとか自分が伝えたいことが伝わらないとか，そういうのはすごくあるんですけど，その点ではすごく苦労したんですけど，でも，自分も理解したいと思うし，相手も理解しようとしてくれているということはわかっている，と僕の中では安心感があったので，その点については一緒の部屋に寝ていてもそれ自体は苦じゃなかったですね。

鈴木も，今回のスタディ・ツアーの中で「通じるか通じないか」という意思疎通の問題があったことを指摘する。ただ，田中とは異なり鈴木は，伝わらない状態も起こるであろうが，互いが相手を理解したいと考えて努力するわけだから，次第に問題は解決すると予測していたと述べている。

4．1．2　キーワードは「コミュニケーション」

2名の最初の発話からわかることは，ふたりが体験を語るにふさわしいと判断して選んだテーマは，初めて出会った他者とのコミュニケーションの問題であった。2名は共に，「コミュニケーション」の話題に触れずしてこの活動の体験を語ることは難しい，あるいは，この話題が活動体験を語るためにふさわしいと判断したと解釈してよいだろう。

2名は，共に大学3年生であり，小学校入学から数えると過去15年近く他者と触れ合う社会生活を営んできた。特に，大学入学後は，初めて出会う他者とのコミュニケーションの機会も増えたであろう。しかし，2名の感想を聞く限り，彼らが今回の活動をこれまでの体験とは大きく異なるものとして捉えていることが窺える。そして，この活動の重要な要素のひとつに「初めての他者とのコミュニケーション」を据えていることがわかる。

4．2　難しかった体験と楽しかった体験

次に，2名が，何を「難しい」「楽しい」と判断したのかを聞いてみよう。

4．2．1　事例

(田中－2)難しかったこと

やっぱり，コミュニケーションですね。私は中国語が全然わからないから，言うこともできない。相手が日本語を学んでるっていうことに頼り切っているところが，少なからずあったんですよ。特にCちゃん（台湾人学生）は一番できる子だったからすごく頼ってて，「言葉の違い」ってうまく伝わらないことがすごく難しいなと思って。

田中は，難しかったことは「やっぱりコミュニケーションですね」と指摘する。また，その難しさの要因に「言葉の違い」があることを挙げている。ツアー活動で最も重要な要素はコミュニケーションであるが，今回のツアーのように異言語話者と混成チームで活動する中では特に言語の壁が大きな問題となること，「言葉の違い」が円滑なコミュニケーションを阻害し「伝える・伝わる」作業に自身も苦慮したことを強調している。

では，この田中にとって楽しかったことは何だろう。

(田中－3)楽しかったこと

楽しかったことですか？（中略） お互い，話したいから一生懸命伝えたくって必死になってるじゃないですか。でもその必死になるのがすごく楽しい。あ，いまこうやってコミュニケーションとれてるんだ，って，ストレートにちゃんと伝わってるわけじゃないけどすごく遠回りをしてるけど，でもそれが楽しくて，人と関わるのが好きだから，それがすごい楽しくて，幸せでした。自分の伝えたかったことが伝わった瞬間とか達成感感じましたね。

田中の楽しかったことは，「難しい」と予測していた「異言語話者とのコミュニケーション」に「必死」で取り組み，頑張って「成功」したことだと言う。「伝わった」とき，努力が報われたと感じ，それは「幸せ」や「達成感」の体験になったと述べる。

では，鈴木の「難しかったこと」，「楽しかったこと」は，どんな体験だったのだろうか。

(鈴木－2)　難しかったこと

やっぱり，一番難しかったのは，自分のことになるけれど，自分の意見，が言えるかとか，チーム活動とか，そういうたくさんの人がいる中で，自分を出せるか，どうやって出すかも含めて，すごくそれに苦労して，うー自己表現とか，それが一番苦しかったですね。

鈴木が難しかったことに挙げたのは，チーム活動の中で自分を表現することであったと言

う。このことから，鈴木は，これまで多数の他者に自分の考えを伝える体験をあまりしていないこと，あるいは，伝えることに成功した体験がないこと，ツアー内の理想の自己イメージは，たくさんの人の中で自分の意見がはっきり言える人であること，ツアー活動中は自分なりに理想の自己に近づける努力をしたことを示そうとしていることなどがわかる。

(鈴木－3)楽しかったこと

うーん，やっぱりだんだんと，一番自分を出してみようと思ってからの交流になるんですけども，そこからはすごく自分のチーム以外の台湾の学生としゃべってみたり，楽しくわーとか遊んでみたりとかいろんな話ができたり。大学の，D君とか，Eちゃんとかとはしゃべった気はするので，それなりに，ですけど，それがすごくよかった。

鈴木が「楽しい」「よかった」と感じた体験は，自己を表現するよう努めた結果，他者とのやりとりが成立し楽しく話ができるようになったことであったという。

4．2．2　コミュニケーションが中心テーマ

「難しかったこと」・「楽しかったこと」という質問に対して，田中も鈴木もコミュニケーションを中核にした体験を語っている。田中は，異なる言語の他者とコミュニケーションをとるという難しい課題に挑戦し，努力の結果目標が達成でき，達成感を味わったこと，鈴木は，これまで苦手としていたこと，すなわち，多くの他者に対して自分の意見を伝えるという課題を達成し，苦手意識を少し克服できたことを「楽しかったこと」と表明している。

これらの語りは，交流の中でのコミュニケーションに関連する体験が，ふたりにとって特別な意味を持つことになったという認識を示している。今回のプログラムが，これまでに体験したことのないコミュニケーションの機会をふたりに与えたということも示していると解釈してよいだろう。

4．3　ストレスに感じたこと

4．3．1　事例

(田中－4)ストレスに感じたこと

ストレスと言えばやっぱその（最終日に）もめた原因にもなったこと，活動前から日本人同士でコミュニケーションがちゃんととれなかったこと，（中略） 日本人と話してるから，それが当たり前に通じるっての当然と思ってる自分がいるんですよ，今話したことも全部伝わってるって思ってる自分もいるけど（中略） 台湾の子と接していてて伝わらないっていうストレスは解消されるんですよ。なんか，確かに伝わらなくて「あ～っ」てなったけど，でもそれは，仕方ないって言ったらちょっと言葉があれですけど，仕方がないことだなっていう前提がある。向こう（台湾）の子は日本語をすごく勉強している。私は中国語ができないっていうので，まずそこで差があるじゃないですか。向こうはこっちに歩み寄ってくれてるけどこっちからの歩み寄りは全くないから，そこでストレスを感じてたら，ちょっとそれは立場も違うし，向こうがすごく努力してるのはわかってるからそういうのはストレスとかは全然感じなくて。やっぱりどっちかっていうと，日本人同士のコミュニケーションの方でのストレスは，解消されませんでした。（笑い）

田中を悩ませたのは，難しいと予想していた異言語話者間の問題ではなく，言語を共有する日本人同士の問題，通じるのが当然と思っていた相手とうまくコミュニケーションができなかったことであったようだ。

興味深いのは，4．2の「難しいこと」と4．3の「ストレスに感じること」という質問に対する返答内容が異なること，また，相手の態度によってストレス度が異なるという指摘である。田中は，異言語間のコミュニケーションに対しては期待値が低く，通じなくて当たり前であると考えていた。それゆえに，努力の結果少しでも「伝える」ことができたら，それは「楽しさ」になった。また，(田中―2)で「Cちゃん(台湾人学生)は一番できる子だったからすごく頼ってて」と言っているように，日中両国語ができる人の助けを借りるなど，問題解決への方法も見当がつきやすい。「向こうがすごく努力してるのはわかってるからそういうのはストレスとかは全然感じない」し，感じたらいけないと思っている。むしろ，お互いに「必死」で努力していることを楽しく感じられると述べている。

一方，同じコミュニケーションの問題ではあるが，通じて当たり前と思っていた相手と「ちゃんとコミュニケーションがとれない」ことのショックは大きかったようだ。田中の場合，日本人間で生じたストレスは，活動が終了した後もまだ解消されてないという。

このことは，初めての他者とのコミュニケーションの難しさは，必ずしも言語の問題だけではないこと，またそのコミュニケーションに対する評価は，期待値や相手の態度によっても変わることを示唆している。相手が「歩み寄ってくれている」，「努力してくれている」と感じることができれば，コミュニケーションは完全でなくても達成感を感じ，苦労も「楽しい」思い出の一つにもなる。一方，これらの姿勢を感じられない相手とのコミュニケーションは，ストレスに感じるというのである。「ことば」以前に，こちらの期待と現実の開きや相手の「態度」が重要なポイントとなるということである。

では，次に鈴木のストレスについて聞いてみよう。

(鈴木－4)ストレスに感じたこと

いちばんきつかったのが，えっとー，フィールドワークをした次の日だから，８月３１日（活動開始３日目）ですね。その日にフィールドワークのまとめをしてたんですね。で，こうしよう，ああしようとまとまっていくんですけど，僕の中で何かが違うなあと思って，ずーっとそれがもやもやするんですよね，それが，自分が発表したい形が違うのか，その，やりかたが違うのかわからないけど。なにか，なんかちがう。（中略）

誤解した形だったんですけど，そこからバーッとその日の夜にみんなに思っていることをみんなに言ってごちゃごちゃに掻き混ぜて，そこから２日間くらいは，むちゃくちゃな日が続くんですけど。（中略）

要は，僕が勘違いをしていた。Ｂさん（同じチームの日本人・社会人学生）がＰＰＴ（発表資料）のたたき台を作ってくると言ったんですよね。僕もFちゃんも，「それではＢさんの発表になってしまう。これは違う」と。実は，Ｂさんは，（最終発表ではなく）アンケートの集計を作ってくるということだったらしいんですけど。（勘違いして）意見を言い合ってしまった。暴走してしまった。口下手なので，言えなくて，気づいたのも本当に遅くって，気づいた時にはもうＢさんに（話を）切られちゃって，みたいな話になっちゃって，そこからぐちゃぐちゃとなっちゃって。

鈴木のストレスも，実は外国人との「伝え合い」ではなく，日本人同士の誤解が原因となっていたようである。活動開始3日目に始まった鈴木とBさんの間の溝は，その後鈴木の葛藤の原因となる。親しい友人には「バーッ」と話すことはできたものの，Bさんとは十分に分かり合えないまま暴走してしまったと振り返る。

４．３．２　ぎりぎりの挑戦

田中と鈴木を最も悩ませたのは，日本人同士のコミュニケーションであった。そして，このコミュニケーション上のズレは，活動の最後まで2名を悩ませ続けることになった。メンバー中の1

名の日本人とのコミュニケーションがうまくとれず，グループ全体がまとまらない。まとめる方法も見つからないままぎりぎりまで追いつめられる。このようなプレッシャーが，2名にとって大きなストレスとなっていたと考えることができよう。

４．４　学んだこと

では，この交流活動から，2名は何を学んだと振り返ったのだろう。

４．４．１事例

(田中－5)学んだこと

私の中では，それが当然，当然と思っていることは，他の人にとってはそれは当然じゃなかったり，するということですね。もうほんとに，「あ，こんな人が世の中にいるんだ」とか（息を吸い込みながら）すっごく感じて，この交流でってなるとそれが出てきちゃんですけど，でもそれ以上にやっぱり人との関わり方，難しさ（ポーズ）は，一歩目の踏み出しが大事だなって思って，声かけをするにしても，不愛想だと相手はいい気はしないし，だからやっぱこっちから声をかけるなら，笑顔で声かけとか，挨拶するときは笑ってとか，当たり前のこと，なのかもしれないけど，でもそれって難しいなって，ほんと，人との接し方とか，相手がどういう人かっていうのすごく交流で学んで，（笑いながら）いい勉強になりました。（中略）

（最終日の発表直前）もめてすぐのあの話し合いはきついなっていうのもありました。なんか，時間はないけど，もうちょっと冷静になれる時間が欲しかったってのもあります。でも，やっぱ一番とは言えないけど，話し合いがほんとに解決に導くためには一番近いんじゃないかなとは思います。相手とコミュニケーションとって話して，自分の気持ちも伝えて相手の気持ちも聞かなきゃ何が本当かわからないし，ましてや，たとえば人を間に入れたとしてもその人の言い回しによってお互い捉え方が変わって，「なんなの？」ってなると思うから，やっぱり解決するには直接じゃなきゃ意味がないし，それ以外の解決策はないと思います。

田中は，最終日に初めて問題の相手Ａと話し合い，相手の気持ちを聞く機会を得た。そこで，「当たり前」と信じていたことが，必ずしも誰にとっても「当たり前でない」こと，期間中「なぜ相手は当たり前のことが通じないんだろう」，「なぜこちらの声に耳を傾ける姿勢を示さないのだろう」と自分の枠組みで相手を評価していたことに気付いたと言う。「私が逆の立場だったら同じだったかもしれないと思う」と，相手の立場になって問題を捉え直しもしている。コミュニケーションに際しては，「気持ち」を示し笑顔で接すること，問題解決には「自分の気持ちも伝えて相手の気持ちも聞」いて，何が本当かを知ることが大切であると指摘する。また，心の準備ができないままに話し合いに臨んだ田中ではあったが，インタビューでは田中は当事者同士の話

し合いを「解決に導く一番の近道」であると振り返っている。つまり，この話し合いがなかったら，田中は「相手の気持ちを聞く」機会を持たず，相手を誤解したまま活動を終えたことになったが，直接相手の気持ちを聞く機会が与えられたことによって「相手が自分と『当たり前』を共有していない」ことに気づかされた。そして，この相手との出会いと葛藤の体験を通して，「相手がどういう人か」だけではなく，「自分はどう誤解していたか」，「なぜ誤解してしまったか」を振り返り，「逆の立場だったら」と相手の立場から自分を捉え直すこともするようになっている。

(鈴木－5)学んだこと

鈴木の「学んだこと」(鈴木－5)は，前節の日本人社会人Bさんとのぎりぎりの葛藤体験に関連しているため，(鈴木－4)に続いて語られた部分を前半に付して提示する。

意見を言い合ってしまった。暴走してしまった。口下手なので，言えなくて，気付いたのも本当に遅くって，気付いた時にはもうBさんに（話を）切られちゃって，みたいな話になっちゃって，そこからぐちゃぐちゃとなっちゃって。相談して，その時はこのままじゃいけない，早急に直さねばといったところはあるんですけど，でも空回りしていた。そのあとはだんだんと空になっていた自分が満タンになって自分が，やりながら「途中で投げ出してはいけない。みっともなくてもやらにゃいかん」みたいな，「やり遂げたら勝ちでしょう」，という話を聞いて背中を押されて。最初は暴走しがちだったけど，だんだんと落ち着いてきて，そこからは多少波に乗れたという感じで。

Q：この活動を通して学んだことは？
やっぱり一番大きいのはさっき言った自己表現，とそれを出すというのが，やっぱり自分が前に一歩行ってるんですよね，そのときに。その，出るからには相手に伝わるように言いたいし，そういう責任がある，それをするのにすごく苦労するっていう，大変，一言でまとめてしまえば大変さ，すごくそれは学んで，それを学んで，だからこそ一歩前に出ないと見えない景色というか達成感というかそういうものが，すごく，得たものかなと

鈴木は，一時は「ぐちゃぐちゃになっちゃって」，「暴走してしまった」が，「途中で投げ出してはいけない」と思い直し，友人たちから「やり遂げたら勝ちでしょう」などの助言を受け，冷静に考えるようになる。友人の言葉に背中を押されて一歩前に出た結果，困難を乗り越えることができたと振り返る。鈴木は，「大変さ」を乗り越えて一歩前に出てみる体験こそ，自分を一段階成長させてくれる体験であることを学んだと語る。同じ「伝える行為」でも，想定内の「苦労」やちょっとがんばったらすぐに達成できるものではなく，「大変さ」を乗り越えるものでなければ「これまで見えなかった景色が見えてくる」体験にはならないということだろう。

４．４．２　危機的な体験が学びを実感させる

田中も鈴木も,「学び」は,両者の最も辛い体験を通して得られたと報告している。自身に成長の転機を与えたのは,楽しかった体験ではなく,活動が終わった今でもまだ心の片隅に完全に解決されてない問題として残っている体験,最もショッキングで自身を期間中苦しめた危機的な体験から学んだと振り返っている。新たな自己の獲得につながる学びは,簡単に手に入るものではなく,ぎりぎりのところまで追いつめられる危機的な体験を乗り越えて初めて手に入るものであるという認識を示していると言えよう。

４．５　２つの葛藤事例から見えること

田中と鈴木の語りから,以下の4点が見えてきたと言えよう。

1)言語の異なりに起因する誤解よりも,価値観が異なる他者との誤解から生じる葛藤の方が大きい。田中と鈴木を最も苦しめたのは,言語の違う相手とのやりとりではなく,自分の常識や考え方が通じると思いこんでいた日本人との間の誤解であった。このことから,次の2)が導かれる

2)価値観の異なる他者との意思疎通が前提となる活動は,気づきや学びを誘導する可能性が高い。

3)努力が報われる体験よりも,葛藤体験の方が,学生に「学び」を感じさせる。

2)および3)については,以下の第5節で議論を深めたい。

4)学びのプロセスは多様であり,固有である。

田中と鈴木の学びの環境や直面した問題には,多くの共通点があった。しかし,ふたりの葛藤のプロセスとその結果得られた「学び」は異なるものであった。他者との相互作用は,やりとりの相手,話の内容,その場の状況,対話参加者の性格や問題意識,などによって,そのプロセスは異なってくる。

また,相手との相互作用と同時に,自分との対話も起こるだろう。この自分自身との相互作用も,その時の気分,異なるものを受け入れる準備態勢,目的意識,自己の理想イメージなどによってそのプロセスは異なるだろう。さらに,そのときどきの周囲のメンバーの視線や相互作用も学びのプロセスに影響を及ぼすだろう。このようにみると,学生の学びのプロセスは極め

て固有であり，多様であることがわかる。

5．スタディツアーという環境が提供する「成長」の要素

ここでは，田中と鈴木の語りから見えてきたことの2)「価値観の異なる他者との意思疎通が前提となる活動は，学びを誘導する可能性が高い」，3)「努力が報われる体験よりも，葛藤体験の方が，学びを感じさせる」についてもう少し掘り下げて検討してみたい。

5．1　価値観の異なる他者との意思疎通が前提となる活動は，学びを誘導する可能性が高いか。

田中も鈴木も，このスタディツアーで他者とのコミュニケーションを通じて大きく変化したと語った。それでは，意思疎通が必要とされる環境で異なる価値観の他者と対話に参加しさえすれば，学びの機会は得られるのだろうか。

異なる価値観を持つ他者とのコミュニケーションが必要な場面は，大学のサークル活動などでも提供できるだろう。今回のスタディツアーの環境は、これまでふたりが学校教育やサークル活動で体験したものとどこが異なっていたのだろうか。また，それはどのように成長のプロセスに関わったのだろうか。

田中と鈴木にとって，彼らが過去に体験した「出会い」体験と今回のそれは，以下の3点で異なっていたと考えられる。

1）リーダーという役割意識とプライド

今回のツアーでは，2名はチームリーダーであった。2名ともに，これまで見知らぬ他者とチームを組む活動にリーダーとして参加した経験がない。チームのまとめ役，けん引役という役割意識とそれを支えるプライドは，ふたりを困難から逃避しにくくし，逆に困難に立ち向かう動機を与えたのではないだろうか。リーダーであれば，コミュニケーションが難しい相手との接触も必要である。「リーダーであるからには，苦手な相手とのコミュニケーションから逃げてはいけない」という意識が，これまで2名が参加したサークルの体験と異なる部分だったのではないだろうか。

2）共通理解に至るまで話し合いが求められる場

本活動は，企画から最後の発表までの全プロセスを，全員参加で行うことを前提としてい

る。サークル活動でも，メンバー間の意思統一は求められるであろうが，趣旨に賛同できないものはチームから離れていく，あるいは別チームを結成するという道も開かれているだろう。しかし，本活動は，全員がグループ全体の目指す目標･方針をコミュニケーションを通じて理解し，その目標に向かって作業を進める協働学習を目指している。グループ全体のコミュニケーションを前提とした活動であり，全体のコミュニケーションが成立しないところにこの活動はないとも言える。

ただ，メンバーの中にはさまざまな価値観を持つ者がいるため，共通理解を得るまでに多くの時間と労力が必要となる。その話し合いの中で，否応なく相手が自分と異なることに気づかされる。相手と自分の考え方は，どこがどのように違うか，理解し合うためにはどうすればよいかを模索することになる。

3）時間的な制約

約10日間のスタディツアーであるが，移動時間を除くと実質活動時間は1週間である。この時間的な制約も，サークル活動や過去の体験とは異なる点であろう。

交流前にブログ上のやりとりを通じて情報交換はしているものの，やりとりの内容は事務的な情報交換が主であり，価値観の違いまでを知ることはできない。

初めて顔を合わせる他者，それも考え方が異なる他者と理解し合うには時間がかかる。しかし，活動時間は1週間しか与えられていない。加えて，発表資料の作成は，日本語の読み書きの力や資料をわかりやすくまとめる力などが必要であり，日本人学生にとっても困難を伴う作業である。この難しい課題を，日本語を母語としないメンバーや価値観を異にするメンバーと協力して，1週間で仕上げなければならない。この時間的な制約が大きなプレッシャーになることは，想像に難くない。

以上3つの要素が，田中と鈴木に自分と異なる価値観を有する人の存在やその人とのコミュニケーションの難しさを痛感させ，自己を改めて見直す機会を与え，これまでにない何かを「学ぶ体験をした」と実感させたのではないだろうか。

5．2　葛藤の体験の方が学びを誘導するか。

田中も鈴木も，努力が報われた体験よりも，苦しい葛藤を含む体験から学んだと語った。しか

し，なぜ苦しい葛藤体験の方が「学び」を実感させるのだろうか。初めての体験であれば、どんな体験であっても少なからず自分の枠の「一歩外に踏み出す」ことが求められるのではないだろうか。一体，危機的な体験のどのようなプロセスが，学生をして「学んだ」と感じさせるのだろう。また，葛藤は，常に学びのプロセスを刺激するのだろうか。

佐藤(1996)は，相互作用の中で生じ，学習や理解の促進に直接繋がる何かを「クリティカルな情報」(同著:92)と呼ぶ。相互作用の中で「クリティカルな情報」が生じ，さらに「個人の能力や技能として内化される」(同著:92)。その結果，これまで個を閉じ込めていた殻が破られ新たな世界，新たな自分が見えてくる。それが，真の学びであると説明する。ただし，単に「クリティカルな情報」に刺激を受け，個人内部に認知的葛藤が生じるだけでは不十分であり，相互作用の中でそれらが共有され，さらに個人内部に内化されていくことが重要であると言う。このようなプロセスを経て，新たな自己の獲得が可能となると述べる。つまり，学びは他者との相互作用の中で生じるものであるが，単に他者と触れ合い，なにかに気づき，刺激を受けただけでは，新たな自己の獲得には至らない。この個人内部に生じた認知的葛藤が他者との相互作用の中で共有された上で内化されるというプロセスが必要なのである。

田中も鈴木も，自分とは異なる価値観を持つ日本人との意思疎通につまづき，葛藤を余儀なくされた。ただ，その後の内化のプロセスにおいて田中と鈴木は異なるプロセスを経たと見ることができる。田中は，苦手とする相手から話し合いの申し出を受ける。話し合いのための心の準備はできていなかったが，発表までに時間がないこと，その場で話し合わないと全員参加の発表ができなくなり他のメンバーにも迷惑がかかることなどを考え，話し合いに応じることを決意する。そして，話し合いの中で自分の誤解に気付いていく。相手を理解しただけでなく，「私が逆の立場だったら同じだったかもしれない」と自身を客観的に捉え直してもいる。自分の枠組みの中で相手を判断していたことに気づき，相手の立場から自分を見直している。この点で，田中は，「これまで個を閉じ込めていた殻が破られ，新たな自分が見えてくる」体験をしたと見ることができるであろう。

一方，鈴木は，苦手とする相手との話し合いの必要性を感じるが，相手から拒まれてしまう。その結果，自分なりに自分の枠組みの中で自己を見直し一歩踏み出す努力をすることになる。自分を客観的に捉え，一歩踏み出せた自分を見出している。一歩踏み出すことによって，これまで見えなかった景色が見えてきたと感じている。

ただ，鈴木の新たな自分は，これまでの枠組みの延長線上における自分であり，その意味では「殻が破られ」た結果得られる「新たな自分」とは異なるという見方もできる。

このような自己内で完結してしまう相互作用は，「努力が報われ，自己の価値観を肯定する」ことになりかねないため，注意が必要である。自己の価値観の肯定は，「殻を破る」とは逆に，これまでの自己の枠組みや殻の強化に繋がる危険性も高い[2]。

5．3　スタディツアーという環境が提供する「成長」の要素

上述の5．1および5．2の考察は，「これまでの殻を破り，新たな自分を見出す」という意味での「学び」には，以下のプロセスが必要であることを示していると言える。

＜学びのプロセス＞

①（異なる価値観を持つ他者と出会う）→②（意思伝達の失敗・挫折を体験する）
→③（葛藤）→④（問題解決に向けた努力）（話し合い）→⑤（誤解に気付く）
→⑥（相手を理解する）（自己を客観的に捉え直す）

では，スタディーツアーという環境は，このような個々人の学びのプロセスのどの部分に寄与することができるのだろうか。まず，①の（異なる価値観を持つ他者と出会う）環境は，教室型の授業よりもはるかに豊かなものを提供できるだろう。②③④が生じる環境も，本活動の特徴が提供を可能にすると考えられる。学生主体のスタディツアー自体が，②③④を促進することを意図して，あるいは予測してデザインされているからである。しかし，⑤⑥に関しては，個々に多様で個別的なプロセスであり，事前にデザインできる性質のものではないだろう。また，⑤⑥のプロセスを促進させるための方策や対応も，プロセスの多様性・個別性に十分配慮したものが求められることになるだろう。

6．今後の課題

今後の課題として，以下の2つが挙げられるであろう。ひとつは，これまでの研究で得られた知見を有効に生かす方法を模索すること，もうひとつは，「学び」のプロセスの更なる解明である。

一つ目の課題は，プログラムのデザイン，運営，評価のあらゆる段階で求められよう。学びの

プロセスをより効果的に生じさせるデザインにするためには何が必要か不要か，学生の主体性を確保しつつ学びの環境を充実させるには，教員を含めた環境はどう対応すべきか，先行研究の知見を整理し，プロセスの多様性・個別性を十分に踏まえた方策や対応が求められよう。

2つ目の課題は，研究成果蓄積の必要性を意味する。プログラムの内容，参加する学生の性格，学生が体験する相互作用の質など，学習プロセスに関わる要因の多様性・個別性を考えた時，プログラムをデザインし運営をしていくために必要な情報は未だ極めて少ないのが現状である。スタディ・ツアーにおける学びのプロセスについて，さまざまな研究やその成果の蓄積が求められている。

謝辞

本稿は，この台日交流活動に3年間参加した経験を持つ大村深雪さんが提供してくれたインタビューテープをもとに執筆した。インタビュー録音テープを快く提供してくれた大村みゆきさんと，録音内容を分析し本論集に掲載することを承諾してくれた学生2名に，改めて謝意を表明したい。

（ぶんのみねこ　人間環境大学）

注

1. 本稿が研究対象としたインタビューデータは，インタビュー実施者が卒業論文執筆の目的で実施したインタビューの録音テープを，筆者がインタビュー実施者および回答者の許可を得て借用し，文字化したものである。
2. この「葛藤は，新たな自己の発見に繋がるか」は，近藤・文野（2010）でも検討されている。近藤・文野は，日韓のブログ交流による学生間のやりとりで葛藤を体験したグループを分析した。その結果，葛藤体験グループには，2つのタイプがあること，一つは，最後までお互いに自分の枠組みで相手を判断し，「相手は異なる意見の持ち主で自分たちとは決して分かり合えない人々である」としてやりとりを終わらせるタイプ，もう一つは，他者との相互作用の中で感じた違和感を刺激に，自身を客観視して捉えなおしてみるタイプであることがわかったと述べる。前者は，自身の価値観を是として，相手を説得しよう，理解させようとするが，相手を説得する事に成功しても失敗しても，最後まで互いが自分たちの価値観の枠から出る事はない。それどころか，やっぱり「韓国人／日本人は」とこれまで自身が持っていた相手に対するイメージを強化する事になってしまう。本当の意味で，自分自身を変えることにはつな

がらない。一方後者は，自身の価値観が通用しない他者に出会いショックは受けるものの，自分とは異なる価値観を持つ他者が存在することを認め，相手から見たら自身がどう見えるかを考えてみる。自他を相対的に見ることにより，他者の視点を理解するだけでなく，自身も含めてこれまでと異なる見方で見ることができるようになると分析している。

参考文献

工藤節子・李文茹2009「プロジェクト型ツアーの相互交渉による学び」2010 ICJLE in Taiwan 世界日本語教育大会パネル『2010世界日語教育大会論文集・予稿集』DVD#35:1063-01063-27

近藤有美・文野峯子2010「異文化交流過程に見られる葛藤―ブログ上での日韓交流の事例から見えること―」

佐藤公治1996『認知心理学からみた読みの世界:対話と協同的学習をめざしてー』北大路書房